

## インドネシア出張報告

小林 寧子

出張先：インドネシア

期間：2014年8月21日～9月1日

今回の出張はジャカルタのみであるが、二つの目的があった。一つは、研究しているイスラーム団体、ナフダトゥル・ウラマー（NU）の全国協議（Musyawara Nasional, Munas）を見学すること、2番目には、国立図書館で1920～30年代の定期刊行物を閲覧することであった。

NUのMunasは不定期に開催され、ウラマー（宗教学者）たちの法学討議が行われる。そこで煮詰まった議論を来年開催される予定の全国大会（Muktamar）でさらに討議を重ねることになるが、実質的な議論はこのMunasで行われる。全国からウラマーが大勢集まるかなりの規模の集会である。このMunasは当初5月半ばに予定されていたが、6月上旬に延期され、さらに8月22～24日に延期された。その情報を6月に得て、筆者はすでに予約していた航空券をその日程に合わせて買い直した。出発直前に再び30～31日に延期になったが、まだ出張期間であり、変更になった会場もジャカルタ近郊であったことから見学可能と判断して、そのまま出発した。大会は2010年3月に見学したことがあったが、そこでは法学方法論がわかるような討論は行われなかったため、一度は是非Munasで確認したいと考えていた。

Munasの日程が何度も変更になったのは、2組の正副大統領ペアが接戦となった大統領選挙との絡みである。国内最大の宗教団体であるNUは、大きな選挙となると政党や候補者が有力ウラマーに支援を頼みに来る。1998年の民主化後、NUでは実践政治に深く関与する組織役員が多く出て、2010年の大会では厳しい批判が出た。そのためNUは組織として中立を保つことを宣言したが、地方での個々のウラマーが多少とも巻き込まれるのは避けられない。しかし、NUの顔となる中央指導者（総裁と議長）は発言に細心の注意が要求された。それにも拘わらず、今回組織活動運営の責任者たる議長は、個人的に一方の側を支持すると表明してしまった。一般会員は自由に投票できるとは述べたものの、批判が相次いだ。もともと現議長の組織マネジメントには不満が持たれており、また2010年大会での指導部選挙で敗退した勢力がこれを口実に組織内での影響力を回復させようと動いていた。

大統領選挙は7月9日に行われ、20日に結果が正式発表されたが、敗北した側が選挙での不正を憲法裁判所に訴えた。筆者がジャカルタに到着したのは、ちょうど憲

法裁判所の判決の日だった。夕方7時前に空港からタクシーに乗ったが、車が少なく、いつもよりスムーズにホテルに到着した。運転手さんが教えてくれたが、全国から3万人の警官が動員されて警備にあたり、多くの市民が外出を控えたのだという。途中のラジオや道端の電光掲示板で、訴えが退けられたこと、またデモ隊がすでに解散したことを知った。到着翌日、早速 NU 本部へ行って Munas のスケジュールをもらってきた。NU 関係者とも会い、たび重なる日程変更の顛末について若干の情報を得た。23日朝に図書館へ向かう途中、総選挙委員会事務局がまだ警官隊に警備されているのを目撃した。

ところが、25日にMunasの会場が変更になるとの未確認情報が入ったあと、さらには11月上旬に延期するとの発表があった。東部ジャワから総裁(代行)がジャカルタまで来て決定したようだった。Munasのコーディネーターに言わせると、余計な憶測を避けるために、10月20日の大統領就任までは避けるとのことであった。ここまで厄介なのかとも思ったが、このMunasの会場となったポンドク・プサントレン(イスラーム学校)では、30~31日にはMunas準備会が開かれ、500人のウラマーが集まった。大統領当選が確定したばかりのジャカルタ州知事が挨拶に訪れたが、NU内での復権を試みるホスト役のウラマー(2010年の指導者選挙で敗北した元総裁候補)の得意満面の様子が報じられた。やはりNUが政治と適度の距離を置くことの難しさを改めて知った。

そのようなわけで、NUについては当初の目的は果たせず、28日午後にNU付属の開発NGOの開催したワークショップ「インドネシアと世界の紛争を読み解く」に参加し、地方での活動を展示したパネルを見学するにとどまった。ジャカルタではタクシーに乗るたびに大統領選について運転手さんと話をし、その数は計21人になった。どちらを支持したかを尋ねたが、それぞれ同数(9人)で、残りの3人は住民票の関係で投票しなかったということであった。やはり、緊迫した選挙戦であった。ただ、どちらを支持したかに関わらず、共通して不満を口にしたのは汚職のことであった。スハルト時代から問題視されていたが、民主化後にさらにひどくなったと認識されている。新大統領はその汚点がないのも、アピールする点であったが、少しでもこの問題を改善できるだろうか。

一方、もう一つの目的の資料収集は、植民地末期にNUのライバル団体ムハマディヤが出版した定期刊行物を中心に行った。まずジャカルタのムハマディヤ図書館の文書室を訪れたが、予想通り、古い文献は何一つなかった。ハー・バー・ヤシン図書館も初めて覗いたが、文学関係が主に所蔵されているので、筆者の関心とはずれる。

結局、当初の予定通り、国立図書館での作業に集中した。スラカルタで1930年代に発行された*Adil*(当初日刊紙、のちに週刊誌)の現物を見たが、製本されたものを見て驚いた。マイクロ化されなかった部分は、全く原型をとどめずに小さな紙片と

化して挟まれているに過ぎなかった。係の女性が「ここからなら見られるよ」と頁を開けてくれたが、破損することが明らかなので、頁をめくることができなかった。写真撮影は禁止されており、せいぜい現物の大きさ（A2判）を確認したにとどまった。

その後1923年から1932年までジョクジャカルタ（末期にはプカロンガン）で発行された *Bintang Islam* を閲覧する作業に終始した。同じムハマディヤ系列の出版であるが、装丁や内容がかなりシンプルであり、これでは読者も限られていたと思われる。ただ、丁寧に見ると興味深い記事はいくつもあった。例えば、近年迫害を受けて問題になっているイスラーム団体のアフマディヤが英領インドから蘭領東インドに進出してきたばかりの頃、ムハマディヤが歓迎していることがわかる。それが異端視されるようになるのは20年代末である。30年代後半にはアフマディヤ批判の記事は別のムハマディヤ系雑誌に多く見たが、このような歴史をムハマディヤの人はどう見ているのだろうか。イスラーム系定期刊行物は20～30年代のインドネシア・ムスリムの動向を知るうえでは貴重であるが、今までほとんど使用されてこなかった。

また、*Bintang Islam* も製本はされているが、慎重に扱わないとすぐ破れる保存状態で、今のうちに手を打たないとそのうち読めなくなるのではと危惧した。しかし、中には日本の和紙を使って、保存作業がなされた巻もあった。日本が文化貢献するのであれば、このような地味な分野ではないだろうかと思っただ次第である。